

# 平成28年度 伊那市立伊那東小学校評価表

学校関係者評価；(A：十分達成された B：ほぼ達成された C：不十分であった) 自己(項目間相対を加味した到達度)評価(a：十分達成された b：ほぼ達成された c：不十分であった)

学校教育目標	重点目標(中長期的目標)
○かしこく(自ら学ぶ子ども) ○やさしく(思いやりのある子ども) ○たくましく(健やかな体の子ども)	互いの良さを認め、切磋琢磨しあいながら、共に生きる道を切り拓いていく東小の子の育成をめざす。
	今年度の重点目標
	(1) 「笑顔が集い のび合う学校」の具現に努める。
	(2) 教職員間の協力体制を整え、チームとしての対応を行う。
	(3) 教育方針が児童・保護者に理解されるよう情報発信に努める。

総合評価		
○「互いの良さを認め、共に生きる子ども」を大切に考え、「あいさつ」「読書」「学び合い」をテーマにして、1年間の教育活動に取り組んできた結果、97%の保護者が「子どもは、喜んで学校に通っている(学校評価アンケート・保護者)」と評価している。特別支援が必要な子どもたちや、外国籍の子どもたちをも包み込んで、共に伸びていこうとする温かな雰囲気のある学校になってきている。学力の定着は、様々なテストや検査で、前年度並かやや上回る状況で、着実に一人ひとりの子どもが、自分の力を高めて段階となっている。また、授業や児童会活動等の様々な場面で、意欲的に活躍する児童の姿を多く見ることができた。		
成果と課題	評価	改善策・向上策
(1) 生活指導係からの提案で、毎月の目標に「あいさつ」を取り入れて、いろいろなアプローチで迫るように工夫している。また、職員会議の際に現状の意見交換をし、取り組める事柄を考えたことで、児童会で強調月間の他に、6年生の児童が率先して、毎朝「代表委員会」を中心に全校への呼びかけを行った結果、「元気な明るいあいさつができる」ことが多くなり、来校者からも評価していただいた。	A a	○「形ではなく、あいさつすることの意味・意義」について、学校全体や各学級でも、折にふれて指導してきている。しかし、まだ個人差が見られるので、「自分があいさつすることで、相手がどんな気持ちになるか」を考えさせ、取り組みを継続していく。学校内だけでなく、家庭でも地域でも率先してあいさつができる大人になるよう個々の児童に現在の自分の状態を振り返らせると共に家庭へも働きかけを行う。
(2) 不登校傾向や特別支援が必要な児童に対して、校内の「いじめ対策委員会」・「適応指導委員会」等、さまざまな委員会が、初期の段階から職員間で連絡を取り合って対応を進めてきた。こまめに支援会議を開き、担任一人だけで抱えることなく、学年も含めてのチーム対応してきた。その結果、完全不登校は0となっている。	A a	○様々な事案に対しての対応は、チームを組んで迅速に行うことができたが、予防的対応については、全校体制で取り組むことが課題である。今後、自分の学級だけでなく、他学級の子どもの変化にも敏感に気づき、子どものサインの情報を共有して、迅速な対応ができるようなチェック体制を充実させていく。
(3) 学校だより「むつびあい」は月1回、学年通信・学級通信は最低でも週1回のペースで発行し、学校からのお知らせや子どもたちの様子を伝えた。保護者アンケートでは、「学校の様子を伝え、意思疎通を行っている」への肯定意見が96%であった。	A b	○食育ボランティア等で学校に入り保護者に直接、学校の様子を見ていただいている。今後も、家庭からの意見の吸い上げをもとに、ニーズに応じたきめ細かな情報発信や双方向でのやりとりによる情報の共有化を図ってきたい。

領域	対象	評価項目	評価の観点
教育課程	教育課程	○「自ら学ぶ子ども」育成のための言語活動の向上をめざし、基礎・基本を大切にされた教育課程づくり	○言語活動の向上を図り、基礎基本の学力の定着を進めたか。 ・毎朝の読書活動の充実 ・毎朝のドリル学習の設定 ・個別の手立てや授業形態の工夫 ・むつびっ子ブックリストの作成と推進
		○児童が農作業体験と給食を結びつけ、循環型の社会について、体験をとおり実感しながら学ぶことができたか。	○児童が農作業体験と給食を結びつけ、循環型の社会について、体験をとおり実感しながら学ぶことができたか。
	学習指導	○子どもが主役になる、わかる授業づくり ○学力の向上をめざした定着の時間の設定	○「学習問題」「学習課題」を児童にもわかりやすく提示しての授業が日常的に行われ、学習のすじみちがわかる板書となっているか。 ○授業のユニバーサルデザイン化を進め、どの子にも「できた」「分かった」と満足できる授業の推進。
生徒指導	生徒指導	○温もりのある人間関係づくり	○「あたたかなあいさつをして、相手を気持ちよくする」ことに向けての取組が行われているか。 ○中核となる活動をとおして望ましい人間関係づくりの指導がなされているか。
		○いじめのない温かな人間関係づくりの指導がなされているか。 ○行事等を通して自主性や豊かな心の育成に努めているか。 ○他の人の話に心を寄せて聴くことができているか。	○いじめのない温かな人間関係づくりの指導がなされているか。 ○行事等を通して自主性や豊かな心の育成に努めているか。 ○他の人の話に心を寄せて聴くことができているか。
安全	安全	○「交通事故0」をめざした交通安全指導	○登下校における安全、休日等の自転車の安全等、日常生活の安全指導ができたか。
		○安全の確保のための日常の点検活動の強化	○校舎内外の点検・整備をして、健康・安全確保ができたか。
	地域との連携	○地域にある教育力(人材)の活用 ○保護者との連携	○信州型コミュニティスクールの推進組織の立ち上げと運営を推進することができたか。 ○「のびゆく会」「安全見守り隊」の会議を大切に位置づけ、学校の方針を理解していただいた上での協力要請ができたか。 ○学校の様子を家庭に十分伝えているか。 ○保護者への連絡や相談等により、協力を得たり相互の理解を深め合ったりして、児童の教育に生かすことができたか。
研修	研修	○校内研究修養の充実	○授業に関することや広く教養を深めたりすることなど、積極的に研修に取り組んだか。
		○職員研修の工夫と充実	○校内外の講師を活用しての幅広い内容の研修を実施したか。

成果と課題		
○朝読書と、月2回のボランティアによる読み聞かせにより、言語生活が豊かになってきている。ただ、家庭での読書の時間が徹底できない面もある。毎朝取り組んだドリル(算数・国語)により、「読み・書き・計算」の基礎的な力がついてきている。又家庭学習の手引きを児童の実態に合わせて作成し配布した。周知したり改善したりすることで実態に合った学習の手引きとすることが課題である。むつびっ子ブックリストを作成することにより、児童はより意欲的に読書を勧めるようになってきた。達成した児童は全校児童がいる場面で表彰を行った。	B b	○本年度、8名の学習支援員に4・5・6年の算数の授業に入っていた。その効果は大きく児童は意欲的に学習に取り組むことができた。更に多くの学習支援員を導出し、よりきめ細やかな学習支援を実施する。 ○ドリル学習の実施内容を見直し、個人差の解消に向けて、個々の児童の課題に応じたドリル学習が実施できるように、学習プリントや教材を多様に準備する。 ○「家庭学習の手引き(児童・保護者用)」の改定を保護者の意見を聞きながら進め、東小スタンダードを構築したい。
○各学年、農作物を決め、栽培活動に取り組み、給食に提供することができた。提供し合うなかで感謝の気持ちをもつことができた。校地内に耕作地をつくることで日常的に作物に関わる児童の姿があった。農業ボランティアの支援を得て農業について学びながら栽培することができた。	A a	○引き続き、農業ボランティアを充実させ、栽培方法の工夫と生産活動の効率化を専門性のある方から児童に学ばせたい。保小の連携も活動の中に位置づけ、交流をすすめていきたい。新しい学校農園に平成30年度より移行する。整地等その準備を進めていく必要がある。
○県教委の「授業がよくなる3観点」をもとに、学習課題を明確にすること、学習の道筋がわかる板書の工夫をそれぞれの教師が意識してきたことで、「授業がわかりやすい」と答えた児童が全体の93%(学校評価アンケート・3～6年生)いる。しかし、個人差が大きく、学習に意欲的に取り組めない子どもも一部に見られる。	B b	○「一人一公開」を中心とした日常的に授業を見合って、それぞれのよさを共有したり改善点を指摘し合ったりすること、研究授業による全校体制での授業改善への取り組みを今後も継続して行い「授業が勝負」という教師の姿勢を鮮明に打ち出していく。また、個別の指導計画の作成、学習支援員の導入を更に進めたい。
○個別の指導計画の作成、それぞれの児童の状況にあった教材提示、学習環境の設定を進めてきた。また、特文学級との連絡を密に行い実態と指導の効果を検証しながら取り組んで来た。落ち着いて学習に取り組めるようになってきた児童が多い。	B c	○様々なテストや検査があるので、データを分析して、「この子には、どんな方法で、どんな力をつけていくか」またどのような特性があるかを、職員会議・学年会議等で検討し、職員が課題を共有して取り組めるようにする。年度末には検証したい。
○生活指導係からの提案で、毎月の目標に「あいさつ」を取り入れて、いろいろなアプローチで迫るように工夫している。また、職員会議の際に現状の意見交換をし、取り組める事柄を考えたことで、児童会で強調月間の他に、毎朝「代表委員会」を中心に全校への呼びかけを行った結果、来校者や地域の方々から、「元気な明るいあいさつができる」と評価していただいた。	A b	○「形ではなく、あいさつすることの意味・意義」について、学校全体や各学級でも、折にふれて指導してきている。しかし、まだ個人差が見られるので、「自分があいさつすることで、相手がどんな気持ちになるか」を考えさせ、取り組みを継続していく。学校内だけでなく、家庭でも地域でも率先してあいさつができる大人になるよう個々の児童に現在の自分の状態を振り返らせると共に家庭へも働きかけを行う。
○いじめのない学校づくりをめざして取り組んできた結果、学校評価アンケートでは、95%の保護者が「いじめや非行のない学校づくりに取り組んでいる」と答えており、日常の子どもの人間関係や行事での成長の姿等から、温かな人間関係作りに取り組んでいることが理解されてきている。QUも効果的だった。	A a	○行事について自分たちで創り上げる活動に意欲を持ち、友だちと協力して取り組む姿が多く見られる。そういった姿を認め、自尊感情を高め、他者との良好な関わりを学ぶ機会として位置づけ、よさを体得させていく。なおよしアンケートの実施(2回)とQUの実施と分析、実践、QUの実施の過程を通して学級経営力を向上させたい。
○「交通事故0」をめざして係職員を中心に、全校で安全指導を行ってきた結果、大きな交通事故もなく、安全な学校生活を送ることができている。通学路の安全対策については、PTAや見守り隊との協力や共通理解を進めている。	B b	○児童の安全な通学路確保については、学区内の道路改良工事やため、課題が多くある。地区内の危険箇所を確認地図上に表し注意を喚起してきた。危険箇所マップを新たなものに作り直し、現状にあったものにし交通安全を呼びかけていきたい。
○95%の教職員が、学校施設の安全管理や校舎内外の整備については、「徹底できている(学校評価アンケート・教職員)」と答えている。日常の清掃も、児童と職員が一緒に取り組む姿が多く見られる。地域、保育園との合同防災訓練の実施、災害時、より安全な仕組みを作ることができた。	A a	○地域・保育園との合同訓練を本年度の課題を元に見直し実施する。より多くの地域の方と関わることで、保護者への引き渡し訓練を取り入れ、総合的に安全を確保できるようにしたい。また、年度ごとに危機管理マニュアルの見直しを行っていく。地域の防災訓練と合同で実施することを検討していきたい。
○信州型コミュニティスクール運営委員会を中心に地域の方々意見を聞きながら、組織や学校支援内容を検討することができた。読書ボランティア・学習支援ボランティア・農業体験ボランティア・食育ボランティア等学校支援が充実してきた。	A a	○信州型コミュニティスクール運営委員を増やしさらに充実した学校支援を進めたい。食育ボランティアを中心に地域・保護者の方が学校にきていただくことを第一に運営していきたい。また、ボランティアの組織化を更に進めたい。
○安全見守り隊への積極的な参加や、「のびゆく会」でも活発な意見交換がなされた。ボランティア名簿を再編し組織を構築した。	A a	○安全見守り隊の構成メンバーの高齢化が進んでおり、会員数の減少が進んでおり名簿を再編した。今後は信州型コミュニティスクールに位置づけていきたい。
○児童の様子を写真や作文などの具体的な姿で掲載した「学校だより」・「学年通信」・「学級通信」の発行を多く行うことができた。学校としての情報発信は、しっかり行うことができた。	A a	○教頭が窓口となった外部との連絡調整や、問題解決を迅速に行うように委員会組織が活発に動いたので、すぐに対応指導することができた。さらに教職員からの一方的な指導ではなく、児童に行動を振り返らせ、解決策と一緒に考えさせるといった、児童の育ちが期待できるような指導を進めていく。
○保護者と連絡を取り合っ、様々な問題への対応ができた。必要があれば外部機関(市相談室・福祉課・教育事務所・スクールカウンセラー・SSW・児童相談所・警察等)と連携して対応してきた。	A b	○安全安心メール100%加入を推進し、必要な情報が確実に保護者に伝わるようにしたい。
○授業公開は、本年度全員の教師が行うことができた。「自らの力を高めるように授業を公開したり、研修会等に積極的に参加したりしている」と答えた教職員が95%(学校評価アンケート・教職員)おり、意識が高く、積極的に取り組んでいた。	A b	○特に「学力向上」や「特別支援教育」、「児童理解」といった分野への職員の校外研修の参加を積極的に進める。同僚性を高めるため、教職員が講師となりそれぞれの得意分野について学び合う機会をつくりたい。
○「発達障がい理解」「集中力とリラックス」「全ては子どもたちのために」といった幅広い内容での研修が行われた。校内の堪能な教師が講師を務め同僚性を高める研修を中心に位置づけた。教師としてだけでなく、人間としての幅も広げることができた。	B b	○自己課題解決のための研修を更に推進したい。重点研究を推進していく上でそれぞれが課題を持ちその課題について共に考え合う研究会とし、個々の教職員が、「自己課題」を設定しての研究を進められるようにしていく。